住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター 第12号　　2000年2月29日

特集　まちが子どもを育てていく
―総合学習導入に向けて―

12

発行／財団法人　住宅総合研究財団

第12回住教育フォーラム

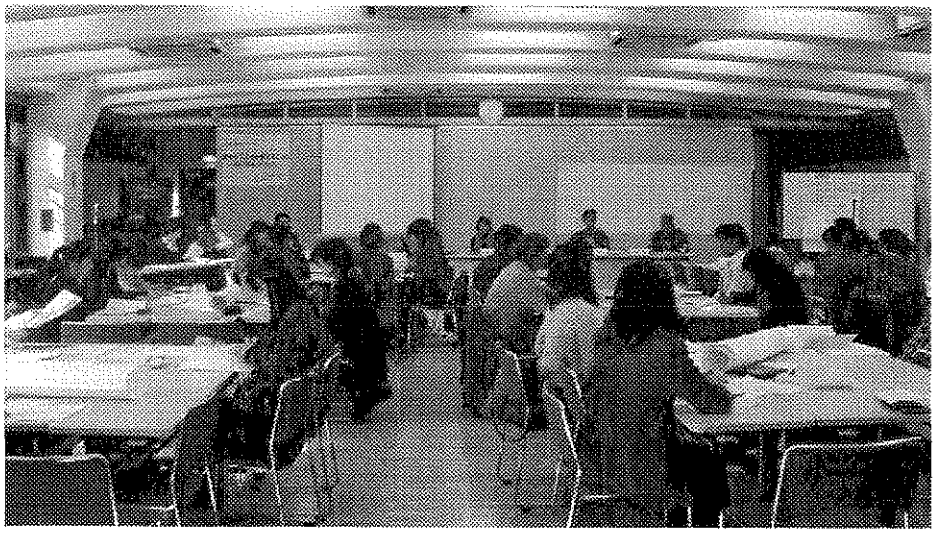
まちが子どもを育てていく
―総合学習導入に向けて―

主催　（財）住宅総合研究財団住教育委員会

日　時：1999年11月27日(土)10:00～16:30
会　場：梅丘パークホール
講　師：町田万里子 氏（筑波大学附属小学校教諭・住総研住教育委員会委員）
　　槇　　重善 氏（谷津南小学校・学校環境を考える会）
　　澤畑　　勉 氏（世田谷区児童館職員）
司　会：木下　　勇 氏（千葉大学園芸学部助教授・住総研住教育委員会委員）
参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者、学生、市民活動家など41名

住教育委員会

委員長　延藤　安弘（千葉大学工学部教授）
委　員　小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）
　　木下　　勇（千葉大学園芸学部助教授）
　　加藤　仁美（東海大学工学部助教授）
　　町田万里子（筑波大学附属小学校教諭）



・表紙・裏表紙カット：町田万里子
・編集・文責：住教育委員会（事務局：永田一雄・平井なか）

まちが子どもを育てていく

司会：木下勇
千葉大学園芸学部助教授

■次代の住まい手・つくり手を育むために

住教育委員会は住宅総合研究財団で７年行っている研究会活動です。日本は、衣食住の中で、世界でも住環境が貧困だと言われて久しいのですが、一向に良い環境にならない。そういう中で、子ども時代、また大人の方々を含めて、「住」についての教育、学習が大事だということから始まりました。社会の問題、環境問題や、子どもを取り巻く様々な問題が深刻になってきて、まちづくりも含めて、環境を自らより良くしていくことに人々が主体性を持ってかかわれるようになるには、どうしたらいいのだろうか、ということを考えるようになってきました。そして、この委員会でこれまでやってきた成果をまとめたものが、『まちはこどものワンダーらんど』（発行風土社、1998年）という本になりました。しかし、まだまだいろいろな問題が山積みになっています。

今回、このフォーラムのテーマとして掲げたのは、「総合学習導入に向けて」です。これは長く文部省、臨教審の審議会などでも、問題として指摘されたことの改善に向けてやってきた一連の流れの中で、開かれた学校へという一つのステップだと思います。それをどうしたらいいのかというところで、現場の教師の方々が悩んでいたり、またそれを受ける地域ではどのようにかかわっていったらいいのか、その辺もまだ不明確です。

メインのタイトル「まちが子どもを育てていく」がやはりベースとして大事だと私たちは考えています。昔から「地域の教育力」が言われていますが、こういうことが言われるようになったのは、それがどんどん弱くなってきているからです。今また子どもに関わる大きな事件が起きても、マスコミを見ても取り扱いが表面的に終わっている。もっと根本的なところから考えて、組み立てて直すということが必要ではないかと考えるところです。

■教師として、親として、地域の大人として

今日のパネラーの方々は、全く違った分野からお三方に登場を願いました。町田万里子さんは、筑波大学附属小学校の先生です。筑波大附属小学校は、実験的にかなり前から、総合学習などに似たようなことにトライしてきています。そういう実践の成果をお話いただけるかと思います。

槇重善さんは、横浜市緑政局の公園緑地行政にかかわる職員ですが、私も所属している元国際遊び場協会の子どもの遊ぶ権利を保障する国際組織（IPA）のメンバーでもあります。ご自分の専門とされるオープンスペースとか公園緑地、屋外環境づくりなどで地元地域で活躍されています。秋津コミュニティという組織で、秋津小学校の空教室を地域が主体的に使って、責任を持って管理運営をしている、そういう活動に最初のころからかかわり、工作クラブとか、今は校庭にビオトープづくりの活動をしています。今日は学校と地域をつなぐという実践として、地域側の取り組みをお話いただきます。

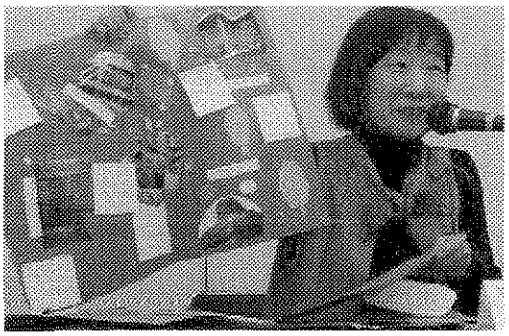
３番手の澤畑勉さんは、日本のアレック・ディクソン、またボランティアの帝王といわれ、日本のボランティア活動の基礎を築いてきた１人です。世田谷はボランティア活動が盛んだといわれますが、それはこの澤畑さんの活躍に負うところが大きく、私自身も、実は澤畑さんに仕掛けられて世田谷に移り住んで、三軒茶屋で住民参加のまちづくりや、子どもの、三世代遊び場マップづくりなどにかかわってきました。そのようにいろいろな人との出会いをつくったりとか、非常に幅広い活動をされています。羽根木公園で開催されるボランティアの祭典「雑居まつり」を裏方で支え、全国のボランティア団体の調整役も行っています。

今日は、澤畑さんに「子どもの居場所」というお話をいただきます。澤畑さんは、児童館の職員で、船橋、鳥山と移られて、現在は新町児童館の職員です。児童館の職員でありながら、職員の領域を越えて、とても広い活動をされています。それは児童館職員の本来の姿かもしれません。そういう専門の領域というのをどう考えたらいいのか、子どもと向き合うという姿勢の大事さを一貫して説いていらっしゃいます。子どもの居場所というのが都市計画関係、住環境などでもよくいわれるようになりました。中高生の居場所は今まで空白地帯であったと盛んにいわれるようになりましたが、それをどのように考えたらいいか。今日は、その辺の基本的なことをお話いただけるかと思います。また、学校とどのようにこれからつながっていったらいいか、というところへ向けてお話いただけたらと思います。

＊　＊　＊

実は、このお三方のお話を、どのようにつなげるかというのが至難の業でありまして、しかし、そのように分化された状況こそ、変えていかなければいけないのではないか。その辺につなぐ糸口が見つけられたらと思っております。では、最初の突破口、町田さんからお願いします。

総合学習導入に向けて
―テーマタイムの取り組み―



町田万里子
筑波大学附属小学校家庭科教諭

■学校が変わる

今、学校が変わろうとしています。2002年から学校が完全週５日制になります。それに伴って、学習指導要領が変わります。すでに1998年11月に文部省から告示されました。どんなふうに変わったか、簡単にまとめてみますと、１つは学習内容が大幅に減ります。２番目に、総合的な学習の時間という新しい時間枠が設定されます。３番目に、学校の自由裁量でできることが増えます。学校で、これまでいろいろな制約で自由にならなかったことが、ある程度学校独自の活動ができる。例えば１時間の単位時間を、小学校の場合は45分と決まっていたのが、自由にいじることができます。例えば、私の学校では今、30分と40分の時間で時間割を組んでいますが、そういうふうに時間割を自由に組めることになります。

ここ数年、学校が変わろうとしているために、現場の研究会が大変賑わっています。先生方が集まった時の、今一番の関心事というのが、総合的な学習の時間をどうするかということです。今までは、学校でやる学習内容は、こういう内容を、この学年でここまで教えること、というのが示されていたのが、総合的な学習の時間の場合は、決められていないわけです。もちろん教科書もありません。時間の枠だけが設定されているということで、小学校３年生から、週１回２時間以上という時間枠になっています。何をやるかということを今、学校の先生たちが模索している段階です。

■30年前から取り組んできた「総合活動」

次に、私の勤めている学校の総合的な学習の時間にあたるもの、「総合的活動の時間」について、お話をしたいと思います。私の勤める学校では、昭和46年、もう30年近く前から「総合活動」という時間をつくっています。これは、国語算数理科社会などの教科のように系統的な順序立って教える内容が決められた学習に対して、子どもの自然の生活、生き生きした興味や関心を持っているところから出発して、内容をつくっていこうというような活動です。今の総合的な学習の時間に非常に通じるものがあると思いますが、そういう時間を組んでいます。その中身は、学級担任と子どもたちが試行錯誤しながらずっと続けてきています。

２年前から、新たに総合活動を見直しました。本校の学校の中身は、すべて教科と総合活動という２つで構成されており、総合活動の中はフリー活動とテーマ活動とに分かれ、その中にいろいろ振り分けられています。例えば、委員会活動はボランティア活動と名前を変えて、この中に入っています。

■先生の提案したテーマを子どもたちが自由に選ぶ

今日は、総合活動の中の「テーマタイム」を取り上げて話をします。テーマタイムというのは、学級や学年の枠を外して、先生の提案したテーマを子どもたちが自由に選んで活動するというもので、今のところ高学年で実施しています。

やり方は、まず講堂へ生徒を集めます。４年生と５年生、あるいは５年生と６年生、合わせてそれぞれ320名ほど子どもたちが集まります。担当の先生（12～14名ぐらい）が前に出まして、１人ずつ順番に、自分のテーマを子どもたちの前で発表をして、「先生と一緒にこういうことをしましょう」という呼びかけを行います。テーマは今のところ、お互いに相談しないで、自分のやりたいことを提案しています。子どもたちは、先生のパフォーマンスというか、テーマの呼びかけを聞いて、そこから選びます。先生によっては、実物を持ち込んで見せたり、あるいはビデオを見せたり、またギターを弾いてみせたりダンスを踊って見せる先生もいますし、もうさまざまな方法で子どもたちに分かりやすく訴えます。

説明が終わりますと、即座に希望用紙が配られ、希望するテーマに○を付けて決定するわけです。その時に、友達と相談する時間をとりません。自分の興味や関心はどこにあるかということを自分に問いかけて答えを出すわけです。その後、用紙が集められて、第１回の説明会は終わります。メンバーが発表され、２回目からは各グループに分かれて、その先生の指定した場所に集まって、次の活動が始まります。

今のところ、週１回、約２時間で７，８週くらいで１つのテーマの活動が終わります。外へ出る活動もあります。

■先生の呼びかけ方とテーマがカギ

これまで５期までのテーマタイムが行われているわけですが、例えば第１回目のテーマの中に、「世界一周大旅行ミート・ザ・ワールド」とか、「東京にある大使館を訪問しよう」というような、内容がとても似ているものもあります。同じようなテーマが出たにもかかわらず、子どもたちが応募した人数がだいぶ違ってしまいました。子どもたちは、先生

で選んでいるのかなという、子どもたちのテーマの選び方に関する話し合いもありましたが、そうでもないことが、それからの調べで分かりました。というのは、例えば１期に「筑波映画会社」で100人ぐらい集めた先生が、３期で「美しい響きを求めていこう」という合唱の活動を提案しましたら、こちらは７名しか集まらなかったということが起きています。必ずしもその先生ではなくて、先生が説明する最初の呼び掛けにカギがある。どんな内容が自分たちはやれるのか、というところで決めているのではないかと考えられます。

大変人数の差が激しくて、平均的な20名前後となるのは１つか２つぐらいです。人数が一番多かったのは「筑波映画会社」です。２番目は紙飛行機の「大空に挑戦」というすごく手軽な活動が、90名ぐらいの人数を集めました。「人情発見、下町食べ歩きの旅」は97名集まりました。大変熱心な先生で、テーマタイムには初参加だったので、非常にテンションが高くて、ビデオでおいしそうな下町の食物屋を見せ、町の様子を説明しました。97名の子どもたちを、どうやって下町まで連れて行って町めぐりをさせるかということで、「どうしよう」と頭を抱えていたのが非常に印象的でした。先生方は手一杯で、ティームティーチングをするゆとりはありません。何とか工夫をして、この先生は見事に乗り切りました。

そうかと思えば、子どもが１人しか集まらないものもあります。４期の「南北問題とは何だろう」というテーマは１人、また「ユーモアのセンスをみがく」というのも１人でした。

■子どもと相談してプログラムを考える

私が提案したテーマは、１期が「手づくりの絵本」。３期に「手づくりのおくりもの」、４期で「夢の家探険隊」でした。「夢の家探険隊」は、私は家庭科を教えていて、その中で住まいの授業が出てきますが、どうしてもこれを教えなくてはいけないという縛りが強く、自分自身が思うように子どもの発想を取り上げてやれない。低学年では「おうちのことは大好き」という子が出てきますし、高学年では建築家になりたいなどという子が出てくるのですが、なかなか授業の中では時間も少ないし、子どもの思うような活動はできない。子どもは、例えば「夢の家」という言葉をどういうふうに受け止めて、これをキーワードに、どんな活動をして、この「夢の家」を追究するか、私は子どもと一緒に、子どもの後からついてやっていきたいという気持があったので、このテーマを提案しました。呼び掛けの時は、「面白くって楽しくって、わくわくするような家はどんな家だろう。住みたい家を設計してみよう」と呼び掛けました。活動のやり方は、第１回目の時に、こんなことをやっていこうということを子ども同士が話し合って、先生と一緒に決めていくわけで、初めからプログラムが組まれているものではないのです。例えば、まちのウォッチングをするとか、専門家を呼んで、建築についての基礎を専門家から学んでみようとか、そんなことも考えられるねという話をしました。その呼び掛けに集まったのは22人で、ぴったりの理想的な数、これならば何とかまちへ出て、住まいウォッチングもできるのではないかと思いつつ活動が始まったわけです。

■学校周辺のまち歩きからスタート

１回目、顔合わせの時に、すぐにまちを歩くことになりました。学校の周辺のまち歩きなのですが、子どもたちは大体、電車とかバス通学で、学校の周りというのはあまり詳しく知らないのです。先生方も詳しく知らなくて、まちづくりの専門家に電話で相談をして、学校付近の小石川４、５丁目、小日向３丁目など、歩いて行ける範囲の所を選んでおきました。

１回目の顔合わせでは子どもたちは、クラスの違う子ども同士が顔を合わせたわけで、名前も知りません。くじ引きでグループをつくって、グループにカメラを渡して歩き出したわけです。歩いているうちに「あっ、あの家すてきだ。じゃあ、写真撮ろう」とか、「あの門が変わっているね」とか、「お花がすごくきれいに飾ってあって、きっと外を歩く人のことを考えているんだよ」とか、だんだんうちとけてくるのが印象的でした。

ぐるっと一回りして、その日は終わり、来週までに心に残ったことをメモしてくるということにしました。次の時は、写真ができ上がっていたので、それを使って、グループごとの歩いた道程をたどりながら、「夢のまち並み」というポスターづくりをし、各グループの発表をしました。

各グループで撮ってきた写真の中から好きなものを貼り、気に入ったところ、自分が住みたい家の要素、キーワードなどを、ポストイットで、「こんな家に住みたいな」ということで表現しました。

子どもたちが書いたキーワードは、例えば、「庭に動物がたくさんいる」「木とか川とか池とかがあって、自然が周りにたくさんある」「明るく日当たりがよい」など。この辺までは家庭科の授業でも出てきます。次に、「家の中に果物などができる家」「家の中から星空が見える家」「家の中がふかふかの家」。これは、床だけではなくて、壁もふかふかというか、話を聞いてみたら『となりのトトロ』の猫バス状態、あんな感じの家を連想しているようです。また、「階段がトランポリンになっている」とか、「折りたためる」「家の中が迷路になっていて、皆で遊べる」「空飛ぶ家」「ガラスの床」「海の上にある家」という突拍子もないようなものも続々と出てきて、「こんなのどうやって本当にできるかな」とか、つぶやきながら、このポスターの、お互いの発表を聞き合いました。

■家の設計開始！住宅展示場見学とシニア体験を生かして

このテーマを選んだ理由というものを話し合ってみると、その中で多かったのは、設計をしてみたいということでした。そこで、家を設計しようということになりました。この時、『まちは子どものワンダーランド』の「家の設計デザインゲーム」を参考にしました。部屋の空間の働き、機能を絵カー

ドにしてマス目の上に並べて、空間と空間のつながりや構成を考えていきます。用意した絵カードを、自分が使いたい機能、遊ぶ部屋とか食べる部屋とか、並べて設計をしました。

子どもたちはやりながら、新聞広告に載っているようなのがつくりたいということで、間取り図に進んでいくわけですが、その時の話し合いで、「本物の家が見てみたいね」「住宅展示場はどうか」、ということが出ました。

「それはいい」ということで、学校から電車で30分ぐらいで行ける住宅展示場を探して電話をして、快く見せていただけることになりました。そこでは子どもたちは、インスタントシニアのいろいろな器具をつけて、不自由なことの体験をしたり、床暖房の工夫を説明してもらったりして、非常に充実した学習ができたようです。２人ずつ組になって、10社の家を自由に回るという形でやりました。私は中央の広場にいて、「あっちが空いているよ」とか、「こっちが空いているよ」とか指示して、見学をしました。見学したことを設計に活かして、最終的に間取り図で子どもたちが表現しました。

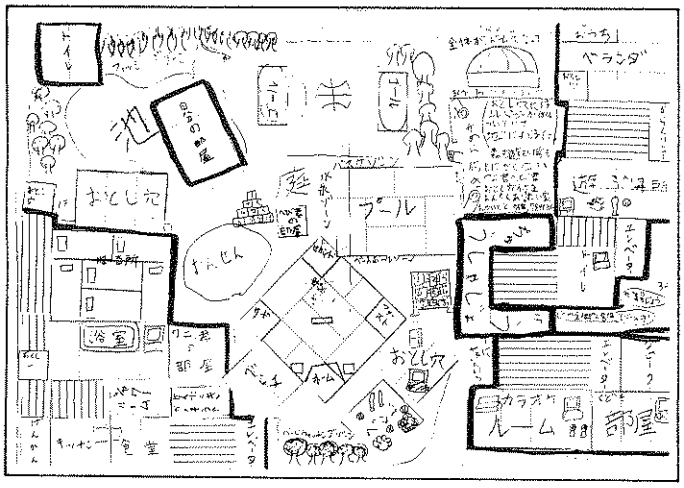
■自由な発想の夢の家ができた！

例えば、この子の場合は広い庭の中に、複雑な形の家がありますが、庭や大小の池や温泉。自分の部屋は池の中にあります。ヘビやワニ君の部屋も用意されています。なぜかお風呂場の隣にワニの部屋があったりして、ちょっと怖い感じです。プールやカラオケルームもあります。こちらは床下を川が流れていて、床が透明な廊下があったりします。この子の場合は、別棟に遊び専門の場所を設けており、犬の部屋とかホビールームとか、カラオケとかバスケットコートなどが用意されています。

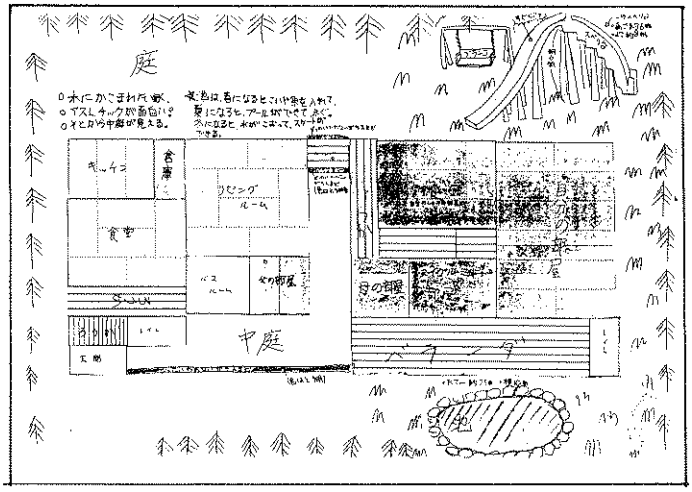
ちょっと面白いのは、中庭にガラス張りの壁があるのですが、この中庭を挟んで父親の部屋と母親の部屋が分かれています。自分の部屋は、この大きな部屋です。母の部屋の隣に空間があるのですが、そこはぬいぐるみの部屋になっています。どうしてこのような配置にしたか、この子にいろいろ話を聞いてみたいと思いました。

子どもの自由な発想を教師の視点の縛りでは遮れなかったわけですが、でもこれで良いかどうか迷います。それはともかくこういうものができあがりました。

○木下　町田さんから総合学習での取り組みの事例として、いろいろなやり方を紹介いただきました。次は、地域と学校とのつながりですが、槇さん、よろしくお願いします。



児童の作品▼



学校とまちをつなぐ
―地域・教師の協働―

槙 重善
習志野市立谷津南小学校・学校環境を考える会

横浜市役所で造園を専門として、公園をつくったり管理したりする部署で働いています。

今日の報告は、子どもが通っている谷津南小学校で、「学校環境を考える会」という、地域住民と先生が会員になっている団体をつくり、実際に校庭をいじって、ものをつくったりしているという活動です。

また、隣の秋津小学校では、工作クラブという、地域の趣味のサークルみたいなものの世話役をしています。そういう意味で、地域に住みながら２つの小学校の先生方と仲良くしているという、不思議な立場におります。

■子どもたちの育つ環境をつくるのは地域の責任

私が地域でこの数年熱心に活動している理由を振り返ってみると、仕事でも公園をつくったりしている関係か、ものを実際につくることが好きだということがあります。自分自身やりたいことをやらせてもらっている、という満足感みたいなものを常に持っているので、活動が継続できているのだと思っています。

先日の朝日新聞に、ＩＰＡのことが載っていました。「五感を使って体験するための環境づくりは大人の責任」という活字になっていましたが、これを今日ご紹介する活動に引きつけて翻訳しますと、子どもたちは自分の育つ環境を自主的に選ぶ立場ではない。多様な体験ができる場所を守ったり、あるいはつくっていくのは、地域社会の責任ではないだろうかということです。地域の側から学校に仕掛けていく、実際にやれるということを、今日は自分の活動を振り返って皆さんにご報告します。

私が地域の子どもの遊ぶ環境に興味を持ったのは、10年程前に市役所の研修でヨーロッパの冒険遊び場の現場を実際に見て、実際にやっている方々といろいろお話をする機会があったからでした。そこからスタートしました。

●スライド１　谷津南小学校で、２年かけて、田んぼと小川を地域住民と先生方の力でつくりました。その現場を運動会に来た保護者や地域の高齢者に見ていただくために、今年の秋につくった説明看板です。

運動会の当日には、お年を召した方から子どもまで、水が流れている小川に非常に興味を持って見ていました。ここ数年の成果として、このような状況が今年の秋、谷津南小学校の校庭につくることができました。

■活動のきっかけは幼稚園の家庭教育学級

どうしてこういう活動を続けてこられたかを振り返りますと、1993年に子どもが秋津幼稚園に入り、PTAの家庭教育学級活動で、妻がPTA役員をやっていた関係もあって、「園庭の遊び環境を考えよう」というテーマで土曜日の活動を行ったのがきっかけです。

私は、1990年のＩＰＡ世界大会（東京・代々木）の時にアメリカ人のグループがやっていた古タイヤを使った「廃材利用の遊具づくり」を見ていました。このタイヤピラミッドづくりは材料代がかからない、短い時間でつくれるということで、土曜日の午前中でやってみようということになり、熱心な教頭先生と仕組んでやりました。

●スライド１

●スライド２

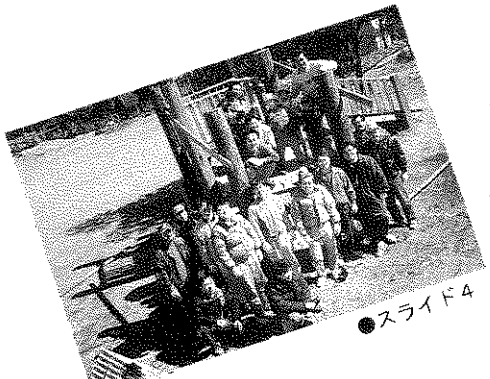
２時間くらいでつくりあげて、その日のうちに子どもたちは登って遊んでいました。これが先生方と地域の住民の方たちと一緒にやった最初の活動です。

●スライド２

●スライド３

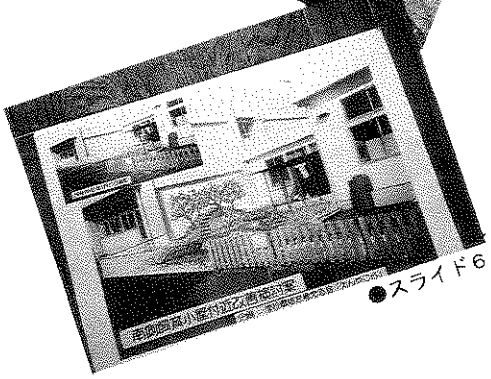
次にやったのは、古い木の電柱を利用して、幼稚園の遊具の塔をつくる活動です。こういうふうに築山の上に、長い古い電柱の塔をつくりました。

●スライド３



●スライド4

●スライド5



●スライド6

この幼稚園では、前から古い電柱や古タイヤを集めたりと、廃材を園庭に常に用意していました。私は、その廃材を見て、ものから発想して、いろいろ活動を組み立てたのです。材料がそこにあることが、活動を引き出すところがある気がします。さらに言うと、子どもたちは別に加工して遊具になっていなくても、素材で遊ぶという姿も観察されました。

●スライド4

同じ年に古い電柱と、寄付でいただいたヒノキ、荷物を運ぶ時の木のパレットで砦をつくりました。木を組む構造などは、建築の専門のお父さんが協力してくれました。作業は、幼稚園児が見ている土曜日の午前中になるべくしています。

子どもが卒園する時に、前年につくった砦の増築にPTAで取り組みました。この時は、秋津小学校の余裕教室を低学年用図書室に改造するという、「ごろごろ図書室」づくりの秋津コミュニティの方たちと一緒に増築の作業をしました。

■学校に地域・専門家がかかわり合うイギリス

1996年秋にイギリスの実際に校庭を総合的に活用している事例を視察に行く機会に恵まれました。見学に行った学校では、学校の中でとれたプラムでお菓子をつくって歓迎してくれたりしました。収穫物を使ってお料理してお客さんをもてなすという、校庭をうまく利用した１つの例かと思います。

スコットランドのニューキャッスル市の小学校では、学校にカフェが常設されているところがありました。スコットランドにはコミュニティ・スクールという考え方があるそうで、地域の保護者や住民が、小学校に行って、小学生と一緒に授業を受けるということに取り組んでいる例があるそうです。また、この時の説明では、このカフェは、例えば共働きの夫婦で、お母さんが子どもを小学校に連れて来た時、朝食を食べる時間がなかったら、学校で子どもと一緒に食べて、お母さんは職場に、子どもは学校に行くということでした。

一方、イギリスの古い小学校では、アスファルトで舗装されたグラウンドの所が多く、こういった校庭を改善する活動を、授業の中で取り組んでいるという例もありました。

外部の専門家、造園の設計や、子どもたちとワークショップをすることの専門家が小学校の中に授業として入り込み、子どもたちのいろいろなアイディアを引き出して、校庭改善プランをまとめたという例を見学しました。

■池づくりのヒントはイギリス視察から

●スライド5　谷津南小の「学校環境を考える会」の最初に取り組んだ作品は、この小さな池づくりです。これは、イギリスで見たビニールシートで池をつくるというアイディアがもとになっています。四角い花壇を掘り下げてそこに防水シートをかけて池をつくろうというものです。防水シートを接合して、１枚の大きい風呂敷をつくり、張り込んでおしまい。２時間ぐらいでつくれてしまいます。

このように、いろいろな所で見てやれそうだなと思うと躊躇せずにやってきたのも、面白かったのだと思っています。

最初、池だけつくったら、校庭からゴミは飛んでくる、サッカーボールは入るわというので、一応低い柵を回すことにしました。この柵づくりは、大工仕事を初めてやったというお母さんも一緒にやりました。こういう活動も、きっかけやちょっと指導をする立場の人がいれば、地域の力でやることができます。

■学校に田んぼと小川をつくっちゃおう！

当時谷津南小では、５年生に農業という授業があり、バケツを利用して稲をつくる体験学習をしていました。教頭先生から、何とかこれを本物に近い稲づくりにできないものかという話があり、次の活動に展開しました。

●スライド6　飼育小屋の前の何もない所に田んぼをつくることにしました。妻と一緒に、こういうフォトモンタージュのような提案の絵を描いて、「こういうのをつくりましょうよ」と学校に持ちかけ、学校がその気になって、教育委員会の施設課から、校庭をいじる許可を得ました。

試しに掘ってみたら、地面が固くて人間の素手では太刀打ちできないので、安い費用で地元の土木業者に入ってもらいました。大きく穴が掘れた所に、メーカーから寄付していただいた大きい防水シートを張り込みます。実際には、張り込む作業にまで、メーカーの施工の専門家が来てくれて、随分お世話になりました。

大きい洗面器状の防水シートの水たまりをつくって、この内側にまた土を入れました。土も、土木業者にお願いして、無料でもらいました。

●スライド7　田んぼの下流に前の年につくった池があり、

田んぼの脇を小川が流れ、築山があって、脇に手づくりの橋があり、橋の下を水が流れて田んぼに入ります。田んぼの中には、農家から堆肥を買って入れました。周りに柵を回して完成です。これが1999年２月でした。校門の外に掲示板をつくって、「できましたよ」と地域にお知らせをしました。

●スライド８　荒起こしをして、水を張って、田植えをしているところです。田植え後、稲がどんどん育っていきます。風の強い日もありました。１学期の終業式の前に、雀避けのネットを先生方と私たちでかけました。

夏は非常に水が減り、朝晩会員のお母さんたちが交代で水を足してくれていたのですが、大変だというので、ボールタップというトイレの水のタンクの中にある装置をつけて、自動給水にしました。

●スライド９　稲刈りは平日の授業でやるので、私などは参加できなかったのですが、会員のお母さん方が稲刈りの準備のお手伝いに参加しました。

５年生が田植えをし、稲刈りをしますが、それを隣教室にいる２年生が見に来ていて、「僕たちも５年になったら田植えができるぞ」と思っているだろうと思います。

実際に稲刈りを指導できたのは校長先生でした。今、農業体験を自分の体験としてお持ちの先生というのは、かなり高齢の先生しかいないのではないかと思います。そういった年代の方がかろうじて、自分の生活体験としての農業を、子どもに伝えることができるというのが今の状況かと思います。

●スライド７

●スライド８

その後、稲穂から脱穀を、子どもたちが軍手をした手でしごいて作業をしました。モチゴメをつくっていたので、最後にそのモチゴメを５年生の土曜日の授業で、少し買い足して餅つきをしました。５年生の先生方が自主的に取り組まれ、そのお手伝いを地域が行ったものです。

●スライド９

こういった活動を地域の側からずっとやってきまして、学校の先生方にあえて要求というものはないのですが、ただこういう地域のコミュニティ活動を、できれば先生方には支援するような意識を持っていただけたらと思います。こういう活動を通して、私たち地域の住民の側自身が地域に知り合いを増やしていって、地域で風通しのいい人間関係を築いているというところも、大事なところだと思います。

■学校を地域コミュニティの拠点に！

子どもたちが健やかに育つために、もちろん家庭と学校は大事ですが、さらに地域が必要だと思います。地域というのは、大人同士のつながりでもあるし、子どもを温かく見守る親以外の大人の目という意味もありますし、それをどうやったらできるかと考えた時に、学校に拠点を置くことはできないかと考えます。実際、それは今の学校教育と社会教育の役割分担とか、いろいろ難しいところがあると聞いているのですが、小学校を舞台に、地域コミュニティが活性化する。そのためには、１つは場として学校が、地域住民が立ち寄りたくなるような学校になったら、それは地域コミュニティをつくる上で非常に有効なのではないかと思います。

先ほどイギリスの例でお話しした、学校にカフェをつくるということを、是非いつか実現したいと思うのです。お年寄りも、中・高校生も気軽に学校に立ち寄って、そこでお茶が飲めるというような場所ができたら、学校が開かれるという意味では、非常に良い場になるのではないかと思います。

○木下　習志野市の秋津小学校・幼稚園、谷津南小学校と、学校区の関係で両方の学校にまたがって活躍され、そして、学校が地域に開かれた、誰もが行きたくなるような場所へというお話でした。ありがとうございました。

しかし、全部の学校がそうではなく、学校に行きたくない不登校の子が出てきたり、学校を抜け出してくる子どもたち、いわば阻害される子どもたちの行き場を考えようということで、最近は都市計画でも中学生の居場所が、神戸のあの事件以来、盛んに言われてきました。前から児童館がそういう阻害された子どもたちの避難場所、行き場所になって、またそこからいろいろな方面で活躍する子どもたちが出てきている。児童館というのは、18歳以下の子どもが対象ですが、社会の通念では小学校、中学生ぐらいの遊び場と言われています。しかし、それだけにおさまらない機能も果たしている。

児童館は幼児サークルなどを開いたり、学童保育の部分もある。実は、児童館がそういういろいろな問題を抱える子育てのお母さんたちのたまり場であったり、現実に不登校の子どもたち、また社会で何か暴力事件を起こしたり、グループ同士の葛藤から、その行き場所になっている。そういう砦というか、基地をつくってきた児童館、異色でありますが、それが当然、社会のいろいろな制度の壁とぶつかっていく。

そういう、児童館が子どもの居場所になっているという例を、澤畑さんからお話いただけると思います。

中・高校生の居場所づくり
―まちが子どもを育てていく―

澤畑　勉
世田谷区児童館職員

私はあまり公務員という枠にはまらないできました。世田谷で、24年前から、思想・心情・宗教を問わず、多くの市民運動の人たちが集まる「雑居まつり」をやってきた人間です。

まずは、ドキュメンタリー「人間劇場」の映像を紹介します。[（　）内は当日の澤畑氏のコメント]

―*今日は、ここを舞台にしたヒゲ親父と子どもたちのお話です。*（これは、３月までいた烏山児童館です）

さて、児童館といえば小学生が遊ぶ場所というイメージが強いけれど、何と18歳、高校３年生まで利用してＯＫ。大人には馴染みが薄いこの施設、子どもたちは意外によく利用している。実は、全国で4,500近く、世田谷区でも25館あります。ここ烏山児童館では、何しろヒゲなんていう変り種がいる所だから、高校生も結構寄ってくるのです。児童館の閉館時間は普通午後５時。でもヒゲは、閉館時間を過ぎてから平気でやって来る高校生たちを、夜遅くまで待っています。

☆ *「ここに来ている子どもたちの何人かが「ちょっと話があるんだ」とか、何かちょっとおかしいな、その子がしゃべってくれるかなと思った時に、何かしゃべってくれると、学校や家では解決できないもの、その子たちが背負ってきたものをここで吐き出したり、荷物をちょっと下ろしてくれたりすると、こっちもホッとできるみたいな感じでね。」*

■児童館は子どもたちの問題を共に考えていくたまり場

私が今日ここで話すのは、子どもの居場所ということです。

私の定義では、児童館というのは、０歳から18歳まで、お腹の中に生命を宿した妊産婦から18歳までの人たちが対象になってはいますが、その０歳から18歳までの人たちの問題を、共に考えていくコミュニティセンターです。ということは、19歳になろうが、かあちゃん、とうちゃんであろうが、隣近所のおっさん、ばあちゃん、誰でもいいのです。生活領域の子どもたちの問題を考えていく人たちすべてのたまり場、それが児童館です。ですから、20歳になろうが21になろうが、児童館に来てはいけないとかいう問題ではない。

実は今、20歳をすぎて行き場所がなくなり、それなりの大学も出た後、もう30を真近にして、職場も辞め、家庭の中に閉じこもり、家の中の形あるものを壊していく若者たちに出くわしています。そういう子どもたちが児童館に出入りしてくれればいいのにと思っているのですが、出入りするのはお母さんやお父さんたちで、閉じこめられてしまった若者たちとの向き合いは、まだ児童館でも、十分ではありません。

■行きたいときに行く、子どもが選ばないと来ない施設

コミュニティセンターですから、さまざまな問題が寄せられる。学校に行きそびれた子どもたちは、朝から児童館へ来る。それを私たちは「児童館登校」と呼んでいますが、別に不思議ではない。当然、学校は問題提起をします。「ご迷惑がかかるでしょうから、子どもが朝から来たら、学校へ電話をください」と言うのです。私はお断りします。「子どもは、学校ではなくて児童館を選んだのだから、学校へは連絡は差し上げません。もし連絡を差し上げたらどうしますか」と言うと、「すぐ迎えに行きます」と言います。迎えに来られたら困るから、子どもはここへ来ているのであって、子どもの居場所を失わせるわけにはいかないと話します。

また、高校生で、前の日にちょっと高校生同士のトラブルがあって、学校はそれをいじめととって、その生徒を朝から呼びつけて生活指導をする。よくあることなのですが、そういう中で、子どもが生活指導の部屋から逃げ出してくる。それも玄関からではなく、窓から逃げ出して来た。学校の教師が後から追いかけて来て、「児童館にうちの生徒がいるはずだ」と。「子どもが来ているはずだ、当学校が始まって以来、生活指導の部屋から、しかも窓から逃げ出したのは始まって以来だ」と。それを何とかしなければいけない、ということでお出でになったようです。私は、その教師の名前を聞いて、その教師が来たということを子どもに伝えます。子どもは、「そいつに殴られそうだから俺は逃げてきた」と言います。私はその時に、「偉いなお前、教師に罪を犯させないために逃げてきたというのはえらいもんだ」と言います。その教師には、「あなたとは会いたくないと言っている。私たちは、それを守るのがここでの仕事だから」と言ってお帰り願うわけです。私たちは、その高校で最も生徒に信頼されている教師と連絡をとります。そして、子どもの意志に従って、本人も電話に出ると言えば電話に出します。

殴られることを前提の学校には、子どもは返したりはしません。自らの生命を閉じるかもしれない状態の学校へ、また

子どもを追い返すというような罪なことは、児童福祉施設で働く職員（子どものいのちと人権を守る立場）としてはできません。児童館は、児童福祉法第40条に規定されている施設です。児童福祉法の中で、唯一、自由来館を目的としています。例えば、教護院は行きたくて行く子どもは誰もいない。児童相談所も、同じです。身体障害児や知的障害を持った子どもたちが通う施設は、自分の意思で行く所ではありません。ただし児童館は、自分が行きたいと思った時に行く施設です。

結論的に言うと、基本的には、子どもが選ばなければ来ない施設です。もっとそれを噛みくだいて言うと、成績はつけません。出席をとりません。内申書は書きません。ところが今の児童館は、そこら辺が少しずつ崩れてきている。いろいろなイベントを通して、子どもたちをどう集めるか、何人集まったか、１日何人、年間何人利用したかということを評価の１つにしている、というところがあります。

■自分が選んだ誰かが居る場所、そこが居場所

次に、中・高生の居場所というのはどんな所か。あえて挑戦的に話しておきますと、先生と名のつく人たちがつくろうと思っている居場所は、ほとんど子どもの居場所にならない。PTAの役員とか、青少年委員とか、肩書を持った人たちが学校を基点にして、ごちゃごちゃと集まって子どもの居場所をつくろうなどと思った所は、ほとんど居場所にならない。

居場所とは何か。子どもたちが居たいと思う所が居場所なのです。子ども自身が、自分を癒せる場所だと思う所。スペースをつくって、空間をつくれば、そこが居場所になるかというと、まずならない。予算をかければできるかというと、それもならない。どうしたら子どもの居場所になるか、どうしたら居られるか。それは子どもに聞くしかないわけです。

今度、私の行った児童館は音楽室を持っています。二重扉、二重窓の室です。ここには中・高生がそれなりに来ます。ギターを弾いて、ドラムを思いっ切り叩いて、波が引くようにさっと引き上げてしまう。貸しスタジオに行くとお金がかかるけれど、児童館はただです。私は、音楽が全く分からないのと、行ったばかりだとか、自分の体調の問題も含めてですが、その子どもたちと真剣に向き合うことができないでいます。いろいろな話はちょこちょことしますが、今はまだゆっくりと話していくという場面をつくれないでいます。

しかし、来るか来ないかという意味では来ると思います。子どもたちが目指している居場所というのは、ただ自分がいて、そこで癒せる、誰もいなくて１人で癒せるというものと、もう１つは、自分が選んだ人がいるということです。児童館というのは、子どもたちに、場所として選ばれるということも大きなポイントですけれども、そこにいる人が選ばれるということが、もう１つの大きなポイントだと思います。

いま中学生、高校生たちの居場所としては、学校という所を居場所としてほしいと思っています。また、彼ら、彼女たちの家庭を居場所にしてほしいと思っています。でも、それは全部無理だということが、子どもたちと向き合っていく中で分かります。それはなぜか。学校、特に思春期の中学生、高校生にとっての学校というのは、常に自分が評価にさらされる場所です。中学生の98%近い子どもたちが進学をするということであれば、内申書を書かれる場所です。出席早退欠席、すべてがカウントされて、それで自分の次の人生、次のスタートにマイナス評価される可能性があるところなのです。

教師の手によって、すべてのメッセージが書かれる。学校教育現場の中では、内申書や進学ということが、ある種の子どもへの脅しとして、管理の対象として使われることがある。「ことがある」ではない、すべてそうだと言っていい位です。子どもたちはそのことを、肌に心に、すべての五感を通して感じとっています。すべてが評価の対象になる、そんな所を子どもたちは居場所にはできない。

家庭はどうかと言えば、今の状況は学校と同じ。子どもの思いとは別の所で動いている。別の所に子どもを追い込んでいる。自らの生命を断つ事件が、ここのところまた報道されていますが、その実態が親によって、周りの大人たちによって把握できなかったということです。その親を責めているわけではありません。子どもたちの居場所というのは、自分のキズや、自分の辛さを聞いてもらえる人がいる場所であり、その場所が学校や家庭の中に、すでになくなってきつつある。逆に言うと、そこにいることが、子どもたちの最もストレスを受ける現場になっているということです。

学校教育の中で、教育相談室というのがあります。世田谷でいうと、若林にある少年センターという警視庁関係の施設、千歳船橋には世田谷児童相談所が、経堂には家庭支援センターがあります。子どもが相談に行っていい場所がたくさんあります。教育委員会の教育相談室は、校長退職者や、若手の臨床心理士を目指している者たちが入っているようです。いつも教育委員会の勉強会などに呼ばれた時に話すのですが、出口調査をしてほしい。相談が終わって出てきた保護者、または子どもたちに「来週も同じ担当者だったら来たいと思うか」と。イエスかノーか、箱を置いて、どちらかに入れてもらう。どっちの箱が直ぐにいっぱいになるかというのは、ほとんど分かっています。大人の罪は、それが分かっていながら変えられてこなかったということです。

私は今、児童館という現場の中にいて、すべての子どもに選ばれたなどとは思えない。だから児童館には複数の職員を配置して、いろいろな形の子どもたちが、いろいろと信号を出した時に受け止められる状況をつくろうとしています。相談を受けたり、子どもたちに寄り添えるということは、子どもが選ぶのであって、担任や児童館の職員、教育相談の相談員になったから、そのことで子どもから選ばれたのではなくて、子どもが選ぶか選ばないかとは、子ども自身にその権利がある。そして、選ばれなかった人たちはどうするのか…？

現実は、そういう面では無駄遣いが多いと思います。

■自分を受け止めてもらえる１人をつくる

児童館は今、少年事件に巻き込まれた子どもたち、また家庭内暴力や、家庭の中に閉じこもっている子どもたち、体罰を受けて児童館に逃げ込んでくる子どもたち、いろいろな子どもたちがいます。そういう中で子どもたち自身が、自分のすべてをそのまま、まず受け止められたかどうかということが、大人を選択する時の基準になっている気がします。

（ビデオ上映）

☆　児童館を離れた今も、ずっとかかわり続けているアラタタカシ君。彼が中学を卒業した直後でした。結構な突っ張りだったタカシ君が、ある事件をきっかけにして東京を離れることになり、ヒゲは松本の友人がやっている障害者の協働作業所にタカシ君を預けたのです。現在は結婚し、そのまま松本で生活しているタカシ君に会いに、彼が当時すごした作業所の寮を訪ねました。

☆　２人が出会ってもう５年、ヒゲにとっては、児童館を心の拠り所としてくれた彼が、今も自分の支えになっています。

☆　タカシ君は現在、松本市内のパチンコ店で働いています。中学時代は仲間とまちにたむろし、問題児といわれた彼も、結婚し、今では子どももできて落ち着いた生活をおくっています。協働作業所で障害者と出会ったこと、そしてずっと一緒に暮らしたい家族を得たこと。ヒゲが望んだのも、きっとこういうタカシ君だったんでしょう。

○アラタ　　ああいう人間って周りにいないしね、どこ探しても。口じゃ言えないけど、何でも言えるっていうか。とりあえずは聞くじゃん。聞くやつってのは、まずいない、大人で。俺らみたいなやつの人間の話を聞くっていう人間がいない。大体、近くに寄ってこないじゃん。例えば、東京にいる時、何かあった時、ケツを持つのはヒゲだなと。だって、自分が逃げて帰って、友達と会ってシンナー吸って、夜中、走り回ってて、真夜中ですよ、２時、３時。児童館を開けて待っててくれたっていう。そんな所、どこ探してもないじゃん。

これは、シンナーを吸ったり、暴走族でいろいろやってきた若者たちが、彼らの居場所、居場所にいる人間をどう見ているか、彼なりの言葉で表現をしているんだと思っています。

私は昨年から、世田谷の中で24時間子どもから声を聞く、心を聞くことを目的にした「チャイルドライン」という運動を、全国に展開すべく行動を起こしているのですが、やっていく中でよく分かってきたことがあります。それは、子どもたちにたった１人でいいから、彼らがしゃべりたいと思う人が傍にいてくれるということです。たくさんの友達をつくれと、よく学校では言いますが、たくさんの友達をつくるのはストレスの元です。たった１人でいいから、自分のことが分かってもらえる１人をつくれたらいいね、と言っています。もう１つは、「そのたった１人に自分が選ばれたらいいね」。

学校の教師も、実はいろいろな問題について悩んでいます。ところが、教頭とか校長には相談できない。なぜか。自分たちを評価する人々だからです。子どもたちがどうして教師たちをたった１人に選べないかと言えば、評価の対象にずっとされ続けてきたからではないでしょうか。実は教師も、実は親たちも、子どもを取り巻くすべての大人たちが、実はたった１人を見つけられないでいる。そのたった１人に自分が選ばれないでいるということです。

その選ばれていない人間たちが、子どものために何かをしようというところに、どうも無理があるのではないか、というのが私の問題提起です。もう１つは、相談を受ける側、受け手がものすごく疲れ果てている。

■相談を受ける側も癒される場をもっていなければ続かない

望まぬ性を強要され、辛い思いをして児童館に、朝やっと逃げ込んできた女の子と向き合ったりします。過食や虚食や、小さい時の性暴力に今も苦しみ続けながら親をやっているお母さんとか、そういう親たちから連絡がきたり、会ったりします。心の病につながるような問題というのは、私は非常に不得手です。どうしていいか分からなくなります。カッターナイフで自分の腕を碁盤の目のように切り刻んで、血がたれているような状態で子どもが児童館へ、私を訪ねてくることがあります。どんなに忙しくても、２時間も３時間もその中で対応しなければならないことがあります。

相談を受けたり、子どもから話を聞くには、受ける側の人間が、自分癒しをしていくプログラムを同時に持っていないと、それは難しいということです。これは学校の教育現場もそうだし、親もそうです。そこで癒し合える現場をつくっていくことが必要です。学校の中で物づくりをするとか、自分が楽しいと思うプログラムは、楽しいと思える仲間をつくっていくということにつながっていくのだろうと思うのです。

子どもにとって家庭や学校が居場所にならなかったのと同じように、実はお母さんもお父さんも居場所を求めている。学校の教師が、自分が勤めている学校に毎朝行く時に、ワクワクドキドキし、今日はどんな変化を子どもからもらえるんだろうかというような思いを持って学校へ行っているだろうか。本当に学校という所が自分の居場所になっているだろうか。家にいる専業主婦というお母さんが、本当に自分の家庭が居場所になっているだろうか。親も居場所になっていないその家庭に、子ども、特に中・高校生の、もう家から出てもかまわないような年齢の子どもたちを、非常に手抜きのご飯をつくり始めているお母さんが、食べもので思いとどめようと思っても、もう無理がきているのではないでしょうか。そういう意味で居場所というのは、子どもたちにとっての居場所だけではなくて、「ひと」にとっての居場所というものを考えていかなければいけない。人にとっての良い居場所が、これからの住環境の中で必要なのではないかと思います。

○木下　　澤畑さんから、居場所のまさに基本的な意味というものを、非常に具体的な経験の中でお話いただきました。示唆に富む言葉がいっぱい出てきました。

それでは、これから質問を受けていきたいと思います。

質疑・応答

■限られた時間の中でどこまで取り組めるか
専門家からのアドバイスもほしい

○山田　町田先生に質問です。「夢の家探険隊」の報告を拝見していて、盛り込まれている内容はとても奇抜で面白いと思ったのですが、つくられたものが全部四角の組み合わせだったのはなんでだろうと思ったのです。日本の３尺６尺のモデュールでつくられた紙を貼り合わせてつくったということで、その原因が分かりました。発想は非常に豊かだったのですが、つくられたものは、ある意味では貧困だという感じがしたのです。もう少し違う工夫はなかったのかということを感じましたので、その辺のところをお話いただければと思います。

○町田　表現方法については、子どもたちと十分詰めて膨らませる時間がなく、子どもたちが間取り図の表現がしたいということでやりました。その辺の不十分さはおっしゃるとおりだと思います。決まった大きさのものを切り貼りしてつくっていく方法というのは、非常に手軽で、４、５年生の子どもたちが抵抗なくできるのではないかというこちらの判断で、限られた時間の中で持っていったために、子どもが初めから自由に書くという活動を組めなかったのです。

来年の１～３月に行われるテーマタイムでは、もう一度住まいを取り入れた環境学習を組んでみたいと思っております。後半のワークショップで、具体的にどういう方法が考えられるか、是非、専門家からお聞きしたいと思います。

■学校とよい関係で活動をはじめるためには

○大木　槇さんにお聞きします。「学校環境を考える会」という楽しそうな会がどうやってできたのかということ。そういうことをやろうとすると、先生は「何、このうさん臭そうな集団は？教育の専権を侵すやつらが乗り込んできた」というふうに思いがちだと思うのです。「学校はみんなの居場所」となるには、お互いに「こんなことできないね」と言えるような関係でないとなかなかできない。どうしても壁を感じてしまうのですが、どうやって学校の先生方と、そういう関係で付き合っていけるようになったのか、またはできていないのかといった辺りをお聞きできればと思います。

○槇　活動のスタートは、まず私は教頭先生に熱心に手紙を書きました。秋津幼稚園では、PTAと地域の保護者と学校の先生との協力関係で、実際に具体的に子どもの遊び場を多様なものにする実践がやれた、成功したぞという自分の経験があった。そういうことをやる地域の協力者はたくさんいるはずだという信念というか信頼感があって、教頭先生に熱心に手紙を書きました。保護者宛に学校長が「学校の校庭改善をやってみたいという保護者からの申し出があるので、そういう会を始めたいと思うが参加者はいませんか」という文書で呼びかけたところ、熱心なPTAの元役員の方たちなどが手を挙げてくださいまして、20人ちょっとでスタートしました。

スタートする時の考え方に「活動したいと学校に申し出る」というのがあります。申し出る人が誰かいないと、そういう活動のきっかけは起きないだろうということです。自分に専門的な知識がなくても、そういうことを是非やってみたいので、学校から地域に呼びかけてみていただけませんか、というふうに言う方がいれば、学校はカリキュラムが変わる時期でもありますし、地域の力を必要としているという状況は、多分どこの学校でも同じだと思いますから、そういう意味では学校に申し出て、学校から保護者に呼びかけてもらうのがいいと思います。私は学校で起きるさまざまな事柄の最終責任者は学校長だと思っていますので、私たち地域の住民が学校を舞台に何か活動するのは、やはり学校長の了解のもとでやっていくというスタンスを崩してはいけないと思っています。逆に言うと学校長は、地域の住民がかなり自由にやることを、大目に見てくれる度量を持ってほしいというのが裏腹であります。

■将来の夢を共有できる地域有志がいれば、学校も動き出す

「学校環境を考える会」がスタートした時に「谷津南小の校庭発展構想」という絵を用意しました。小学校の10周年に人文字の航空写真をこどもが学校からもらってきたので、この校庭の部分を切り抜いて、こういうふうになったら良いですねという絵を描いたものです。これは、こうならなくてはいけないというものではなくて、一つの学校の校庭を、こういうふうに改造することもできますよ、少なくともそういう夢を持つことはできるのではないですかというものです。

その時には、田んぼも小川もなかったものが、２年経ったらできてしまったというところに、地域の力のすごさを感じています。屋外ステージとかもできたらいいなというのがこの絵の中に入っています。やはり、将来ビジョンのようなものを共有できる地域の有志がいれば、学校も動くのではないかということだと思います。

■児童館は本当の居場所になっているのか

○川越　澤畑さんにお伺いします。今のお話では児童館がカウンセリングルームというか、ソーシャルワーカーみたいな機能を持っているように感じたのですが、ただ、さっきの

お話の中で、学校とか、あるいはPTAとか、肩書きがつくものがつくった所は子どもの居場所にならないとおっしゃいました。児童館自身も、行政がやっているわけですから、本当に子どもの居場所になっているのかどうかかなり疑問です。最後に大人の居場所というお話もありましたが、児童館自体が50いくつの小学校に対して20ぐらいしかないという現状で、生活圏にはない。やはり、大人自体が子どもとともに居場所をつくらなければいけないのかと思っているのですが、児童館のかかわりと、数と、行政の姿勢、そこら辺を含めて、詳しくお話いただければと思うのですが。

○澤畑　私は、公民館とか、○○青少年センターなどの勉強会に呼ばれることがあります。相談を受ける内容は、中学生や高校生が夜たむろするので、どうしたら追い出せるのか？ということです。公民館とか青少年センターという所にたむろする子どもたちはどこから来るのか、と聞くと、すべて地元の子なのです。私は、児童館にみんな集めようなどという気は全くないわけです。子どもが選んで、公民館や○○センターに集まる。そこの人たちが間違って私などを勉強会に呼んだりすると、大変なわけです。椅子をどう撤去したらいいかとか、子どもが集まらないように、どうしたらいいかというのを私に向けようというのは、どだい無理なのです。

■まずは、胃袋をつかむこと!?

「公民館には調理室があるよね、夕方からどこかが使っていますか」と聞くと、大体、午前中か午後までしか使っていないと言います。「それなら、カレーライスとか、ソース焼きそばなど、匂いの出るものをたくさんつくって、子どもたちは腹がへっているんだから、子どもたちの気持がつかめないというんだったら、まず子どもたちの胃袋をつかむことよ」という話をします。毎日やるのは難しいから、せめて週に1日とか2日とか、そのぐらいのことはできませんかという話をします。そうすると、少年がタバコをふかしているとか、ベタッと座り込んでいて非常に見苦しいと地域住民は言う。彼らに選ばれてその場を共有できるようになると、彼らがもつエネルギーが伝わってきます。

神戸の震災の時、私は長い間現地へ行ったり来たりして思ったのですが、震災とか防災とかいろいろな面を含めて、活躍するのは彼らなのです。予備校に真面目に行っている子、親の言うとおりに育っている子、学校の思いどおりに育ってきた子どもたちで、ああいう場で活躍する子は少ない。ところが私の所に来ている、少年事件に巻き込まれたり、被害者になったり加害者になったりしているような子どもたちは、非常に活躍する。もともと、おまわりさんに追いかけられて逃げ足は早いですし、体力も日常的につくっていますし、いろんなメリットがあるわけです。その子どもたちが動き始めるというのは、素晴らしいことだと思っているのです。ところが、そういう子どもたちを地域は、全部レッテルを貼って排除していく。

■大人の勝手なレッテルが子どもの居場所をなくしている

私の児童館も同じです。いろいろな色をした髪の毛の子がいるとか、タバコを吸いながら児童館に入ってくる子がいるとかと言って、非行の巣のように言ったり、「学校へ行かない子たちが行く児童館なんていうのは、お宅の子どもは行かせないほうがいいわよ」などということが、学校の教師によってPTAの中で語られたりするのはしょっちゅうです。子どもたちの居場所を取り上げたり、居場所をなくしていく動きをしているのが、逆にそういう人たちなのではないかということです。

数は、世田谷に小学校が64あります。児童館は25ですから、小学校区にはもちろんありません。なければ、全部の小学校区につくるかというと、その必要はないと思います。つくっても、それは職員のための施設になるだけですから、今の段階ではやめたほうがいいと思います。ここに世田谷区の職員とか、役所の人間がいれば大きい声で言いたいのです。いつも言っていても、一向に聞き入れてもらえないのですが、今、世田谷区のやっている児童福祉行政の中では、子どもはすさんでいくだけですし、予算をどんどん削られていって、ほとんど活動はできなくなっています。心ある職員は、自分の心をいためてしまって、退職を余儀なくされていくという、非常に危険な状態になってきています。

先ほどの町田さんの話や、槇さんの話の中にあるように、どういう方たちがそれを支えているのか。支えているというより、支え合っているという関係だと思いますが、その支え合っているという状況の中で、その人たちをまちはどう評価していくのか。プラスの評価もあればマイナスの評価もあるわけですが、プラスの評価というのは、人間はあまりしない。「どうしようもない、あいつは、児童館を辞めさせるべきだ」というのは、すぐにも上のほうに伝わるのですが、子どもに認められたりという話は、表面的には動かない。現場で動いている教頭さんとか、現場でそのことを認めてきた人たちを、逆にどんなに素晴らしいことなのかということをお互いに認め合っていくものを、地域の中できちっと開いていかないと、尻つぼみになっていくのではないかと思います。

羽根木のプレーパークを20年前に開設して、一緒につくってきたわけですが、あれは1年だけのつもりで動いてきた。国際児童年を記念して動いてきた事業です。それも、マスコミが多く働いたり、いろいろなイベントごとに、区役所のトップの人たちをパーティに呼んだりとか、いろいろな手段を使いながら存続させていくことを運動としてやっていったわけです。それをどう評価するか。評価というのは、さっき私が言った内申書の評価とは違う意味での評価なのですが、やり続けられる支援者、応援者たちをどんどん後ろからつくっていかないと、大変になるのではないかと思うのです。

○木下　後半は、グループでディスカッションの時間をとりたいと思います。進め方について、延藤先生お願いします。

後半：ワークショップ

「これからの住まい・まち学習 ―壁新聞“未来号”をつくろう」

■現実の問題・悩み、提案を伝えるための壁新聞

○延藤　　３人のお話は、私たち大人あるいは専門家の生きざまを問い直す、とても触発される内容でした。

この中身を深め、今後のお互いの動き方のイメージを分かち合うために、午後は全体討議からグループディスカッションに移っていきたいと思います。テーマは、お話いただきました３つのテーマを基本にしながら、それ以外のものも含めてグループに分かれてみましょう。

今日は、議論したことを表現のスタイルとして「壁新聞づくり」ということでやってみたいと思います。新聞というのは、どこで事件が発生したか、あるいは何が問題かということが、記者のまなざしにかかっているわけです。何が現実の深い悩みの問題なのか、あるいはそれを突き抜けていくようなでき事がどこに生まれているのだろうか、どういうふうにそれを構想できるだろうかということで議論したことをまとめていきたいと思います。現実的なことから、将来起こってほしいビジョンにいたるまで、壁新聞の中に描き込んで進めたいと思います。

■誰にどのように伝える壁新聞をつくるのか

新聞のスタイルは、いわゆる新聞風でもいいですし、美しいポスター風でも結構です。固い新聞というイメージではなく、誰にどのように伝えるかという、そして、どういうことについて提案するか、あるいは現実の問題を掘り下げるかという議論をしながら、壁新聞の主題、物語の流れを引き出していきます。

後半は、その中身の物語や提案を作図します。壁新聞というスタイルと表現の面白い、創意工夫がこらされたプレゼンテーションに、皆が手を動かしながら、技を出していただきながら、表現をしていただきたいと思います。

最後に各グループ３分間の発表をします。発表は、単なる「こういうことを考えました」という説明ではなく、書かれていない中身を、さらにイメージとして膨らませるようなプレゼンテーションを工夫していただきたいと思います。寸劇風があってもいいし、テレビレポーター風があってもいい、子どもに語り聞かせるというスタイルがあってもいい。そしてどのグループの作品に惹かれたかという、議論のための投票をもって、全体討議を進めて着地点という流れです。

壁新聞づくりで大切にしたいこと

1．現実の事件（各自の体験）の発見と取材
2．素材を解釈して表現（プログラムの提案など）する
3．視覚的に伝える
　（壁新聞としてレイアウト、内容で工夫を）
4．発表に工夫を加える（発表を寸劇風にするなど）

この３テーマに分かれました！

・総合学習導入に向けて
・学校とまちをつなぐ
・中・高校生の居場所

「これからの住まい・まち学習―壁新聞“未来号”をつくろう」プログラム

step１　なんでこのテーマを選んだか
　：自分の活動経験などを含めて伝えよう
step２　誰にアピールするための、どこに貼る壁新聞にするか考えよう
step３　出来事と内容を発想しよう
　：これからの住まい・まち学習の課題と提案
step４　新聞のタイトルを考えよう
step５　レイアウト、作図開始！
step６　発表に向けて作戦会議
step７　発表
step８　投票＆討論
　：お互いの新聞をよく見てみよう

ワークショップ「壁新聞づくり」発表！

テーマ：学校と地域を結ぶ **「小梅新聞」**

ーねえ、4月から土曜日が休みになるんだって。
それでね、新聞つくったんだ。
ーみんなにインタビューしてみました！

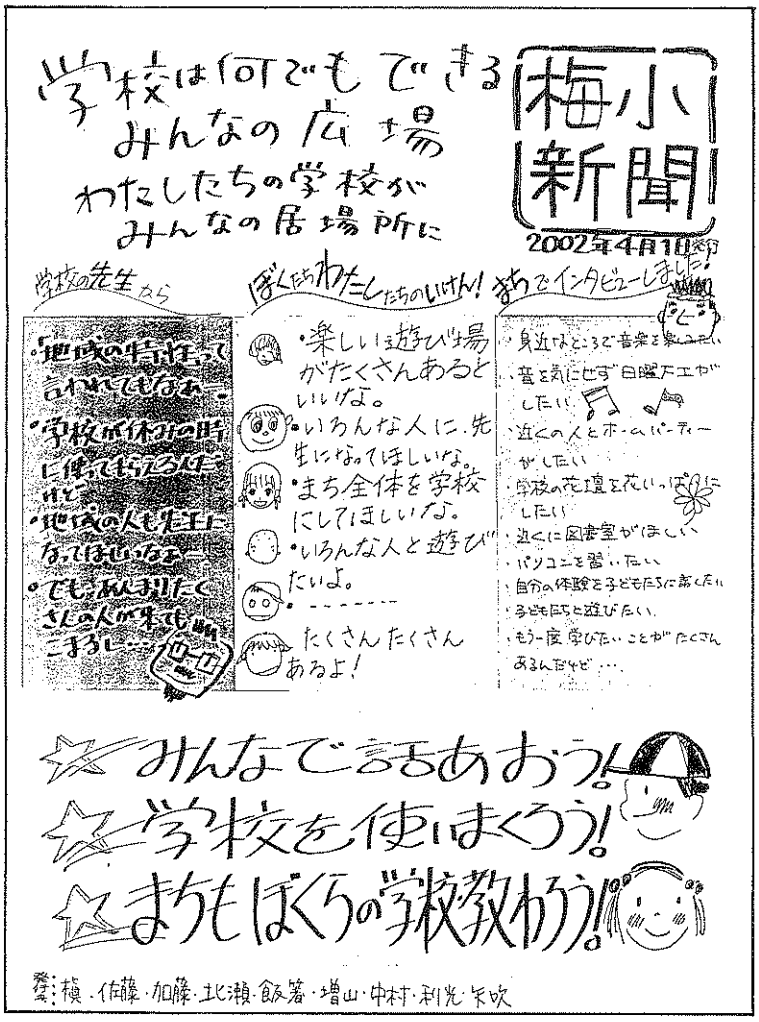
学校の先生：急に地域の特性なんて言われてもなぁ。地域の人も先生になってほしいなあ。でも、あまりたくさんの人が来たら困るしなあ。

僕たち：
まず楽しい遊びがたくさんあるといいな。あと、いろんな人に先生になってほしいなあ。まち全体が学校になったら楽しいだろうなあ。いろんな人と遊びたいよ。

まちの人：身近なところで、もっと音楽を楽しみたいけど、そういう所がないんですよね。日曜大工が好きなんですけど、チェーンソーとか、近所迷惑になってしまうから家ではできないし、音を気にせずに日曜大工ができるようになりたいですね。
ホームパーティーもしたいけど、家が狭くて…大きい調理場があるといいなあ。あと、学校の花壇を花いっぱいにしていきたいな。

まちの人：
この間、関西のほうから引っ越してきたんやけど、このまちは何にもなくってあかんわ。近くに図書室もないし、パソコンも習いたいと思っても、近くにはないし、もう一度、小学校で学びたいことがあるんやけども、本当にこのまちは整っていないなあ。

ー僕たちはみんなの意見を聞いて、いろいろ悩みました。やっぱりもっとみんなで話し合ったほうがいい。お父さんお母さんや学校の先生も文句ばっかり言っていないで、話し合おうよ。だけど、僕たちも入れてね。もっと学校を使いまくろうよ。もっと僕たちの遊び場所にしたいな。まちには、たくさんいろいろなお店やすごい人がたくさんいるから、みんなみんな学校の先生だと思って、まち全部が学校だと思うことに決めました。



各グループの発表後、積極的に討論するために、参加者が1票ずつ自分の名前を書いた付箋を投票した。その際、自分の参加したグループ以外のもので、内容、表現、提案など、一部分または全体を通して惹かれたものとした。
その後の討論であがった声を「声・こえ・コエ」として、紹介する。

「小梅新聞」への声・こえ・コエ！

「一番具体的な提案として出てきて、すごく受け止めやすかった」(加藤)

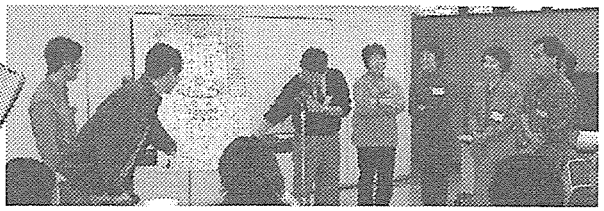
「私たちの班では絵やコメント的な短い言葉になったのを、きちっと言葉でまとめていたなと思いました」(持田)

「同じようなテーマで私たちも話し合いましたが、最後にきちっとまとめているので、言いたいことが伝って、しかも内容も納得できました」(阿望)

「これから学校は、広さも、いろいろな設備もあるので、みんなが集まってくる所ではないかなと思います。それが非常にコンパクトによく表現できていたと思います」(今井)

テーマ：学校とまちをつなぐ

「孤化個（コケコッコー）CO新聞」



ーお鍋で孤化個（コケコッコー）CO新聞！

「孤独」の「孤」が化けて、「個性」の「個」になる。「CO」はコミュニティーの頭文字です。発行元は「変（かわる）タイムズ社」、決して変（へん）タイムス社と読まないでください。

ーえっ、学校に赤ちょうちん、大スクープ！

ーコンビニ弁当、ファーストフード、いま、子どもたち、教師たち、親たちみんな「孤」の時代を生きています。

ーあっ、あの「孤」がこの「個」に！

ー「子ども印のだし」みんなでお鍋。

ー地域のお鍋で遊びに薪を燃やして。

ーグツグツ、グツグツみんなで煮こもう。

ーみんなで遊ぼう。おじいちゃん、おばあちゃん、子どももみんな集まって、コンサート、地域の文化向上に努めましょう。

ー廃材も手作りアスレチックに。頭を使って地域に貢献！

ーお母さん、僕の学校のこと、知らないんじゃないの？　お父さんも学校に来て、一緒にお絵描きとか、算数とか、勉強したらどうなの。お父さんも学校に興味もってよう。

ー地域でもキャリアアップができる。働ける学校。みんなで汗して、学び合えるねえ。

ーあっはっはっ、他人の子をしっかり叱れるおせっかいじじい。

ーこらーっ！

ーでも、優しいときはワラジ作りも教えてあげるんだ、ほっほっほ。父ちゃんたちも、立ち寄れる学校居酒屋。かあちゃんはレモンティー、僕はジュース。

ーやめられないコミュニティー。　やっぱり学校に赤ちょうちん。

「孤化個（コケコッコー）CO新聞」への声・こえ・コエ！

「地域や教師、みんなが協力し合わなければいけないということを、非常にユーモアの中で表現されているのが面白いと思いました。プレゼンテーションも協力し合っていたので、よかったです」（重盛）

「いろんな人たちが本音で向き合ってコミュニケーションを取り合っていくことが重要ではないかということが上手に表現されていたと思います」（井元）

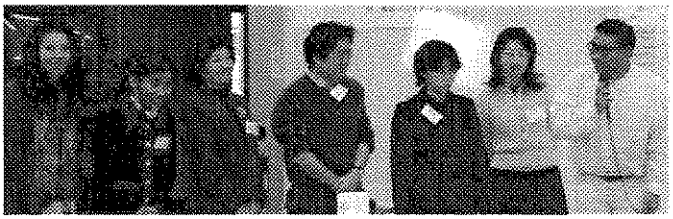
「学校とアルコール、お父さん、お母さん、まちのいろいろな人たちが集まっていく、学校がそういう所であっていいのではないか。食べ物を通して、アルコールも出て、いろいろな人たちが話し合ったり、とっ組み合いの喧嘩になったりとかというのを、あるがままに見せていく、地域がさまざまにつながっていくところになるのではないかということで、「赤ちょうちん」という名前に、すごくこだわってみました」（澤畑）

「短い時間に、こんな素晴らしい題名ですごく感動しました。私は「たむろ新聞」に参加したのですが、同じ内容だなと思いました。お節介じじいとチクリばばあとか、あと食べ物に例えたところとか、そこら辺がやはりつながるものかなというのも感動でした」（小倉）

「創意工夫に富んでいて、よかったと思いました。特に「赤ちょうちん」という親しみのある、みんなが温かい気分で集まるというところがよかった。プレゼンテーションも含めて、楽しく拝見しました」（三上）

「「たむろ新聞」で考えていることと、同じ内容というのに驚かされました」（木下）

テーマ：総合学習 **「総合学習ー知識は地域に眠っている」**



ー総合って何ですか？

ー総合ってね、とっても楽しいの。普通の教科と普通の教科を合わせると、合科の授業ができます。そして、特別活動なども入ってくると、総合学習になります。

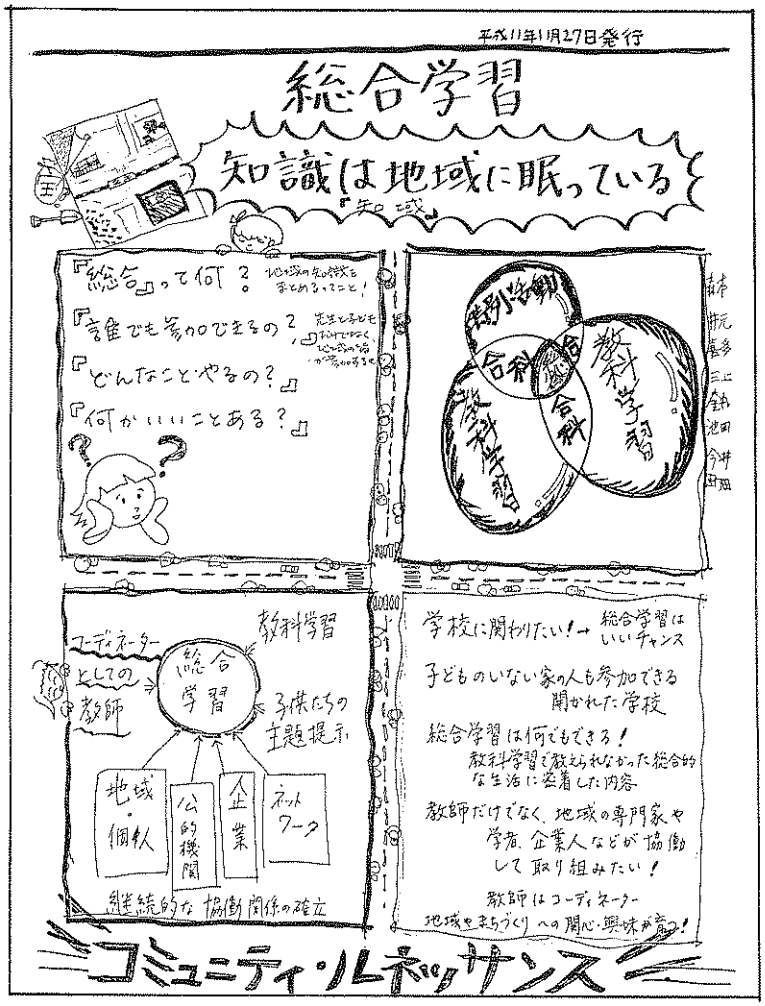
ー総合学習って、誰でも参加できるの？

ーもちろんです。子どものいない家の方も参加することができます。おじいちゃん、おばあちゃん、子どもがいらっしゃらない方でも、教師だけでなく、その地域の専門家や、学者の方、企業人などがコラボレーション（協働）して、取り組みたいですね。

ーふうん。ところでどんなことをやるの？

ー総合学習は地域に分散している知識に、子どもたちがアクセスできるように、先生がコーディネートして、実現することができます。この場合の地域は、個人だけではなく、公的機関や企業、ネットワーク等に分散している知識も含まれるわけです。こういったものと継続的に共同関係をつくっていけるような手法を考えていくことが重要です。ーちょっと難しそうなんだけど、何かいいことあるの。

ーつまり、総合学習というのは、学校と地域、それから学校と住民、それから先生と生徒、いろんな意味でのコミュニティルネサンスということが言えると思います。



「総合学習」への声・こえ・コエ！

「表現不足ですが、先生と生徒だけの関係じゃないということを、地域の人に何とか伝えたいと思いました。総合学習というのが、我々も含めてまだ理解されていないという部分がある気がします」（金丸）

「このグループでは、『総合学習』って何だろう、学校での学習、学ぶって何かなというところから始めたので、たくさんいい意見は出たのですが、それを砕いて訴えていくところまで、時間の中で達せなかったというところがあります。」（町田）

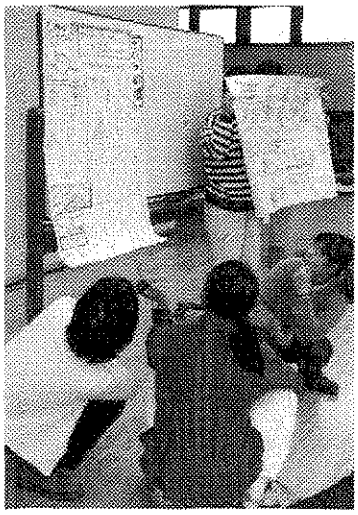
「固かったなという感じはしますが、共通の意識として、地域の人たちも、専門家も巻き込んで進めていけば、子どもたちは何のテーマであれ、結局は地域やまちづくりについて興味を持っていくように自然になっていくのではないか、ということです。建設的な意見にはなっていると思います」（井元）

「総合学習が何で引き付けなかったのかというと、プレゼンテーションもあると思うのですが、やはり学校の中に入ってしまって、みんながつながるというイメージが、まだ何か希薄だったのかなと思います。知識は地域に眠っているけれども、本当は学校から飛び出して、まち自体が学校なのではないか、というイメージのほうが、総合学習としてよかったのかなと思いました」（川越）

「ちょっと別のことですが、「家庭」が抜けている感じがするのです。家庭はもう崩壊している、家庭はもう居場所ではないというのが前提となっては困る、それを見つめ直す視点も重要ではないかと思います」（井元）

テーマ：中・高校生の居場所 **「たむろ新聞」**

ー暇だねえ。
ーもう、メッチャ暇で、行く場所ないよう。
ーどうする？
ーとりあえずコンビニ行こうか。
ーああ、疲れた。
ーもうさあ、やることなくてさ。もう学校つまんないしさ。
ーそうそう、団地でたむろしてるとチクリばばあが学校にチクルしさあ。マジムカツクよ。
ー何？「子どもの心をつかむには、まず胃袋をつかめ」、だと。私たちは胃袋か、心って胃袋か、え？「子どもたちはどこにたむろするのだろう？」だって
ー「コンビニ」か「児童館」
ー児童館、ああ、児童館に行っているやつもいるよなあ。
ー「祭りの社の裏」、裏だよな、やっぱりな。
ーそうそう、裏がいいんだよね。あと、夜の公園っていいよな、落ち着くよね。
ーあれっ、何かコンビニに何か補助金が出るらしいよ。
ーコンビニの裏の倉庫を改造して、隠れ場所にしてもらえるっていう補助金らしいね。
ーそうそう、コンビニの前でもこうやっているとチクリババアがたまに来るんだよ。うちら邪魔なんだ。
ー何か食べ物があるといいね、やっぱ胃袋でしょう。
ーそうそうそう、やっぱ食べ物がないとね。
ーけどさ、夜暇なんだよね。
ー塾終わっても、家帰ると親うるさいし。今日も駅行くか。
ーあっこれこれ。マンテン眼ってバンドが、すっごいいいの。
ーえっ、知らない。何、マンテン眼って。
ーストリートで、音楽しているバンドメンバーなんだけど。
ー今夜行こうか。
ーねえ、「ちくりババア改造作戦」って書いてある。
ー是非やってほしいよね。学校にチクって、うちらに何にも言ってくれないんだよね。
ーそうそう。
・・・・・



「たむろ新聞」への声・こえ・コエ！

「今日は、企業が何か子どもの環境に貢献できないかという思いで参加しました。「居場所はつくるものではない」という一言をしみじみ感じました。また、大人の視点でなくて、子どもの立場に立っていたのはこの新聞だけという気がしました。」(藤田)

コンビニについに補助金！について

「補助金はいろいろばらまかれているのですが、必要なところにきちんと使っていく必要があると思います。」(佐藤)

「その、コンビニに補助金という発想にが面白いなと思って貼りました。」(加藤)

子どもの心をつかむには、まず胃袋をつかめ！について

「表現がすごいいいなと思う。学校が何か組織対組織ではなくて、やはり個人の発想というときに、何か心をつかもうというと、すごい観念的で、子どもはどういうふうにしたらいいかとかいって、こっちから詮索してしまうのだけれども、何か胃袋だったら具体的で、もう自分でも発想ができるというか、イメージができるということで、何か具体的なところで向き会っていくという、そういうマインドを感じたので、１票入れました。」(三矢)

「講演を聞いたときも、居場所についての居場所をつくっている人、家庭だったら親、学校だったら先生がそこを本当

次ページにつづく

に自分の居場所と考えているのだろうか、というのがすごく印象に残っていたのでそこに張りました。」(増山)

「お店の前で子どもたちがベチャッと座ってしゃべるという設定がすごく楽しくて、上手に表現されていたのと、チクリばばあ、チクリじじいの改造作戦というのが子どもならではの発想で、直接私たちに言わないで学校に言い付けるなんてひどいという気持がすごくよく出ていて、いい表現だったと思ったので、つい入れましたけど。」(山田)

「私たちは子どもの立場でと考えていたのが、このグループになると、もう子どもになりきっているというか、それで何か子どもって、こんなことを考えているのだなとスッと入っていけたので、こちらに1票入れました。」(妹尾)

「3人の迫真の演技に入れました。たむろする少年たちに関心はあるのですが、そういうことを自分がしたことがないのです。だから、本当にかかわっている人が意見を出すというのも、非常に大事なことだと思いました。」(中村)

「「たむろ新聞」を作っている中でも、たむろというのは、やはりかかわっているもの、考えているもののたまり場、居場所ということが出ていました。」(木下)

「チクリばばあ改造計画に入れました。今の若者は内向的な受け止め方をするのですが、改造計画というと、すごく前向きな姿勢だなと思います。そういう人間関係をつくっていくことが、重要なことだと思いました。」(川越)

＊　＊　＊

○木下　今日は家庭、学校、地域をどうつなげていくかという、さらに進んだ成果を得たのではないかと思います。それでは延藤先生にこれからのことも含めて、まとめをお願いします。

まとめ

延藤安弘
千葉大学工学部教授

■共通のキーワード「変わる」「つなぐ」「発想転換」

4つの作品に、共通したキーワードが3つほどありました。1つ目は、現状分析から未来展望をして、私自身が変わろうという、「変わる」「改造」というキーワード。2つ目は、つなぐ、開く、コミュニケーションの質を変えるという、コミュニケーションの中身に分け入る提案がありました。3つ目に、そのコミュニケーションの質を変えるためには、発想を豊かにする、発想転換を図る。何かに例えるとよくわかるとか、あるいは新しい想像力の翼を人々の心の中に広げてくれるという、何かメタファの力とか、たとえや想像力の翼に刺激を与えるような、発想そのものを私たち大人が鍛えないといけないのではないかということを、それぞれの作品が語っていたのではないかと思います。

今日は「まちが子どもを育てていく」という主題に向かって議論とアイディアの交換をしてきました。まちが子どもを育てていくためには、私たち大人が、こんな人になりたいなという、人が育っていく、大人自身が変わる、その変わるのがこんな人になりたいという、人物像がくっきりと見えてきたように思います。

■子どものつぶやきに耳を傾ける

第1点は“active listener”という、澤畑さんがおっしゃっていた、ジーッと聞く耳を持つ大人になろうということです。上から下へ一方的に押し付けるコミュニケーションがあまりにもはびこっている中で、子どものつぶやきに、ジッと耳を傾ける、ミヒャエル・エンデの『モモ』のように、困っている人にじっと耳を傾けてあげると、その人の心が晴れるというような大人になろうということです。

■自分が楽しむと相手も変わる

第2点は、“self player” 自分が楽しいことをやらない限り、相手は変わらない。相手を楽しませるためには自分が楽しむということです。真面目な体系的なことを伝えるという善意のあまりに、子どもの心が萎縮したり、枠にはめたりする。子どもは楽しみながら、遊びながら育つ存在であるとすると、私たち大人自身が遊び心を持って、たゆまず自己を変える、自己を遊びながら変えていくということです。

■究極の癒しの人

3番目は、“ultimate therapist”という、究極の癒しの人になりたいなという言葉が発話の中に響いていました。澤畑さんの子どもの相手を求めている「私とあなた」という、最も人間的な出会いの機会を誰もが求めている。この出会いの関係を多様な場に求めている、「あそこに行けば何か心が癒される」という、究極の癒しの場を保てるような、“ultimate therapist”という、あまりない言い方ですが、そういう存在として、私たち大人や教師が変わらないといけないのではないかということが、語られていました。

■明日(あす)の大人・教師・専門家像

ちなみに、この“active listener”聞く耳を持つ人、“self player”自ら楽しみながら他者をも楽しい存在に変えていく、“ultimate therapist”究極のセラピスト。この頭文字を“asu”と束ねてみますと、これは明日の教師像、明日の地域の大人像でして、今日１日の語り合いの中に、明日のまちが子どもを育てるためにかかわる、私たち大人や教師の専門家の、新しい人物像、１人ひとり変わらないといけないという、こういう人に変わりたいねという、そんな方向が各グループの発表と、午前中の３人の素晴らしいプレゼンテーションに触発されて、こうした方向性がかいま見えてきたと思います。いささか強引なまとめかもわかりませんが、「あれは何やったんやろう」と思い返す想起の力を持っているのがゴロ合わせの重要な意味でして、遊び心というのがやはり人間を心底から解放していく重要な機能を持っているのではないかということです。

また、別の機会に今日提案されたことを、それぞれの職場・地域で実践を重ねていただき、持ち寄って、再び創造的な環境学習やまち学習、総合学習のあり様を語る機会を持ちたいと思っております。

フォーラムを終えて

この日のフォーラムは午前の部での3人の方のすばらしい話題提供と午後の壁新聞づくりでたいへん中身の濃い話し合いが持てたかと思います。いつのことながら、これから議論する点が見えてきたところで時間切れになってしまうのが残念ですが、これも司会をしていた私の手際の悪さ故かと思い、少し心残りの点がありましたので、文章で付け足しをさせていただきます。

各班の壁新聞の発表はどれも素晴らしい内容でした。皆さんの感想の中にもそのような意見が多くみられました。その感想の中に、シール貼りの評価をすることに異議を唱えている意見もありました。1つしか選べない点が問題との指摘もあります。他の班の中での話し合われた中身を知らないで、数分のプレゼンテーションのアピール力で評価されてしまうことにも釈然としない気持ちを持ってしまう方もおられるかと思います。これらはワークショップの中のゲーム的な手法の1つで、その結果が重い意味を持つのではなく、参加者と議論をするきっかけづくりにすぎません。とは言っても、その議論の時間が十分にとれず、この結果を契機としての議論づくりが出来なかったことが心残りの点でした。

総合的学習のプログラムに票が集まらなかったのは実際、私にも多くのことを考えさせたものです。学校外の地域でやれることにはやはりイメージがつきやすいのですが、学校の中の教育のプログラムになると、その専門家たる教師以外のものには、自分にも関わりのあるものとしてのイメージが持ちにくいというのが根本にあるのではないか、と気がつかせてくれたのがこの評価ゲームの結果です。教育が聖域として教師以外のものがタッチできないような関係をつくりあげたのがこれまでの教育としたら、教師と教師以外の地域の人や各種専門家との協働(コラボレーション)を教育の中でどのようにつくっていくかが、これからの教育の課題かと思います。その実践の機会でもある総合的な学習の時間が果たしてそのように機能しうるかどうか、その問題をも投げかけていたかと思います。教師側からの呼びかけを待つだけではなく、我々、教師以外の者も総合的学習の時間をどのように盛り上げて、今の子どもたちに必要とされることを伝える、またはともに学んでいくか、積極的な関わりがなければ、何も動きはしないのではないか、という感じもします。だが、何を？、どうやって？などのこれといった具体的なイメージを今のところ提唱できないのがつらいところです。そのためにも、この日のフォーラムのような、学校の教師と他の専門家や地域活動のリーダーの方々とが顔を合わせて話し合う場がもっともっと求められるのかと思います。

評価のシールは1枚でよかったかどうか、3枚にしておけばよかったかどうか、など、ワークショップのスコアには悩みはつきものでありますが、3枚にしていたら、このような問題を深く考えることもなく、どれも素晴らしい壁新聞ができた、と喜んで終わっていたのかと思います。ひとえに時間との勝負で議論を未消化のまま終えた司会者のいいわけにもならない話として、聞き流していただいても結構ですが、ワークショップは関わる者の意識に絶えず働きかけるプロセスに意味があることをご理解いただければと思います。　（木下　勇）

「住まい・まち学習」関係者の討議の場！

「住まい・まち学習」論文発表会

当財団では、1993年より住教育委員会を設置し、次代のよき住まい手・つくり手を育むための「住」に関する学習のあり方をさぐる、住教育フォーラム等の活動を行っております。

今年度より新たに、各分野・学会に分散している「住まい・まち学習」の関係者が分野を越えて集い、成果・情報を交換・蓄積していく場を設けるために、論文の募集・発表を企画いたしました。

応募していただいた論文の中から、いくつかの論考を発表していただき、これからの「住まい・まち学習」の方法を討議したいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

なお、応募していただいた論文は、発表会の討議内容と合わせて、後日、「住まい・まち学習」論文集として発行する予定です。

日　時：2000年 3 月 11 日（土）

13：00～17：30

会　場：住宅総合研究財団会議室（世田谷区船橋4-29-8）

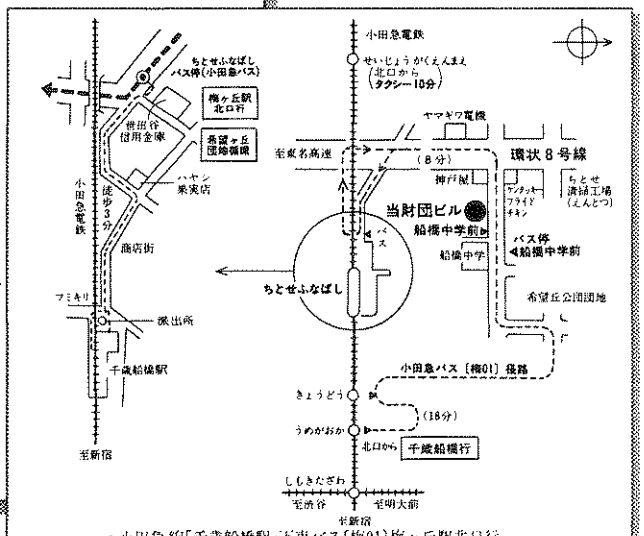
参加費：1000円

定　員：先着50名（お断りする場合のみご連絡します）

プログラム：

- 公募論文より数名の方の発表
- 全体討議（ 終了後、交流会を予定）

＊申込は、①名前、②所属、③連絡先住所（所属か自宅かを明記して下さい）、④電話、⑤ FAX、⑥ E-mail アドレス、⑦この情報をどちらでご覧になったのかを明記の上、E-mail(hirai@jusoken.or.jp)または FAX(03-3484-5794)で下記事務局までご連絡下さい。



住・まちづくりフォーラムかわら版　12

2000年２月29日発行（非売品）

発行人　峰政 克義

発　行　財団法人　住宅総合研究財団
〒156-0055　世田谷区船橋4-29-8
TEL 03-3484-5381　FAX 03-3484-5794
URL:http://www.jusoken.or.jp
E-mail：hirai@jusoken.or.jp

事務局　永田 一雄・平井 なか